

伝統は、見ているだけでは守られない。

—東京大学助教授 宇野重規

地域における希望はどこに。

昨年一月、私ははじめて岩手県の釜石市に出かけた。ちょうどその前に、私は職場の東京大学社会科学研究所の同僚たちと「希望学」という共同研究を立ち上げたばかりであったが、その発足イベントに釜石と関係のある方がいらつしやり、その方から「希望について考えるなら、東京の視点だけではいけない。釜石に来てみると面白いかも」と言われてのことだった。

希望は単に心理的な問題としてだけ扱うだけでは不十分で、むしろ社会のさまざまな状況や制度との関わりにおいて捉える必要がある、というのが私たちの問題意識だった。とりあえずの関心の対象は「希望がない」と言われる若者たちであったが、たしかに地域の視点は重要だ、ということできつそく釜石に出かけたのである。

そこに行くまでの私たちの釜石のイメージは、かつて日本を代表する鉄の町として知られたが、今では高炉の火

が消え、人口の減少と高齢化に苦しむ日本のどこにでもある地方都市、というものであった。いやむしろ、かつて企業城下町だっただけに、現在の衰退もとくに著しいのではないかという先入観があったことは否定できない。

地域として共有すべきストーリー。

そのような先入観は半分あたつていて、半分間違つていた。

あたつていたのは、釜石の場合、製鉄というあまりに大きかった存在に代わる新たな町の産業振興、というよりも新たな町のアイデンティティ模索は、どうしても厳しいものになったということ。そして間違つていたのは、にもかかわらず、その後、危機意識を強く持った町の人々は実にさまざまな取り組みに挑戦し、次第にその成果もあがりつつあるということであった。

昨年中数次にわたる調査を行った結果、過去の技術蓄積を活かした新しい製造業、ミネラルウォーターや水産資

源の再活用、環境保護と観光の融合などにおいて、「希望の芽」がしっかりとまかれていることがわかった。が、それらが結びつき、地域としての「希望」に結実するには、今ひとつ何か足りないとでも思われた。

欠けているのは何だろうか。個々の取り組みをつなぐ人と仕組み、そして地域として共有すべきストーリーであるように思われた。自分たちの地域の本当の特性は何か、何を自分たちは大切にしてきたのか。それを町の伝統と言つてもいい。もう一度、この伝統を町の人たち自身が再発見すべき時期に来ている。

もちろん、それは町の人たち自身がよくわかつていることだ。ただ町の外からの視点も必要であろう。ということで、今も私たちと釜石の人たちの共同作業は続いている。

うの しげき／1967年東京都生まれ。東京大学社会科学研究所准教授。専門は政治思想史・政治哲学。同研究所の共同研究プロジェクト「希望学」(HPは<http://project.iss.u-tokyo.ac.jp/hope/>)サブリーダー。主な著作に『デモクラシーを生きる…トクヴェールにおける政治の再発見』(創文社)がある。